

雑草にも栽培植物にもなった野生植物

ヤブツルアズキ

秋田県立大学生物資源科学部
保田 謙太郎

ヤブツルアズキ (マメ科ササゲ属, *Vigna angularis* (Willd.) Ohwi et H.Ohashi var. *nipponensis* (Ohwi) Ohwi et H.Ohashi) は、日本に自生する蔓性の一年生草本である (図-1)。5月下旬頃から出芽し、ヨモギやススキなどに蔓性の茎を巻きつけて生育する。開花は8月下旬からはじまり、黄色で、大きくよく目立つ花を着ける。莢は成熟すると黒色になり、弾けて種子を散布する。ヤブツルアズキは、アズキ (小豆) の野生祖先種である。また、雑草系統としてノラアズキ (雑草アズキ) がある (山口 1994)。ノラアズキはヤブツルアズキとアズキの中間的な特徴を示し、栽培アズキからの逸出、ヤブツルアズキからの攪乱地適応、ヤブツルアズキとアズキとの雑種後代に由来すると考えられている。

■分布

ヤブツルアズキは日本、中国、韓国、台湾、ブータン、インド、ネパールなどの東アジアに広く分布する。日本では沖縄県と北海道を除く、全国に分布する。林縁のマント群落や河川斜面などの年に数回の草刈りが行われるような場所を好む。ノラアズキは、日本と韓国で確認されており、ヤブツルアズキよりも攪乱の多い場所となる畑の縁や路傍を好む。

■形態と見分けるポイント

地下子葉性であるため子葉は土中にある。同属のリョクトウやケツルアズキは地上子葉性である。第1葉と第2葉は対生する。それ以降に展開する葉は3出複葉である。蔓は2m くらいまで分枝を出しながら伸長する。草型はヤブマメに似るが、托葉の形状で見分けられる (保田 2014)。ヤブツルアズキの托葉は細長く、ヤブマメは卵形である。ヤブツルアズキとノラアズキ間では形態変異が連続的であるため識別するのが難しい個体がある。一般には、ヤブツルアズキの茎は細く、赤紫色である。ノラアズキの茎はやや太く、緑色であり、半直立型の草型を持つ個体が多い。ヤブツルアズキの種子の長さは約4mm であり、種皮色は黒もしくは濃い茶色のまだら模様である (図-2)。臍 (へソ) は白く、細長い。種子のサイズでもノラアズキの方がわずかに大きく、種皮色は黒斑、茶色や薄緑色、薄赤色など多様である。

■雑草としての情報

ダイズやアズキ畑に侵入しており、大分県や岩手県では情



図-1 農地周辺に生育するヤブツルアズキ
このような場所に生育する個体からの種子散布によって圃場内に侵入すると考えられる。



図-2 ヤブツルアズキ (左), ノラアズキ (中央), アズキ (右) の種子

報が県のウェブサイトに掲載され、注意が促されている。ヤブツルアズキによる雑草害は、作物への競合であり、蔓を巻き付けたり、群落上部を占有したりする。ノラアズキは、外見がアズキに似ているためアズキに間違われて成熟期まで残されることがある。異なった種皮色やサイズの種子の混入によってアズキの商品価値を低下させる。ヤブツルアズキおよびノラアズキとも種子には硬実による休眠性があるので埋土種子集団を形成する。圃場に侵入されると数年は注意を要する。

■防除に関連する情報

種子のサイズが他の畑雑草に比べて大きいので土壌処理除草剤の効果は低いと考えられる。中耕培土や非選択性除草剤の株間処理によって個体数を減少させ、復田によって埋土種子の密度を低下させられるとの報告がある (斎藤・小林 2016)。また、種子が成熟するのは9月以降であり、雑草としては晩生である。種子を散布するまでの期間に手取り除草をすることも可能である。

■参考文献

- 山口裕文 1994. アズキの栽培化. 「植物の自然史」 岡田博ら編著 北大図書刊行会 pp 129-145.
保田謙太郎 2014. ヤブツルアズキ. 「原色雑草診断・防除事典」 森田弘彦・浅井元朗編著 農文協 pp. 145-147.
斎藤隆・小林伸英 2014. 大豆作付けほ場におけるヤブツルアズキの防除. 福島県農業総合センター 平成26年度に得られた研究成果. 大分県における大豆作難防除雑草の発生実態と対策 2017. https://www.pref.oita.jp/uploaded/life/1031484_1222851_misc.pdf
いわてアグリベンチャーネット 2016. 農作物技術情報 第5号 畑作物 https://i-agri.net/agri/media/148/20160728-h28-05_hatasaku.pdf